2010 年度 修了

中年期における「転機」の経験
― 中途退職教員のライフストーリー ―

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
尾上　都

50 歳が人生のターニングポイントになると言われる現在において、中年期における「転機」はどのような意味を持つのだろう。また、「転機」と思われる出来事をどのように経験し、自らの人生に位置づけているのだろうか。

人生 50 年と考えられていた時代、目の前に延びている人生という道は、長く続く一本道にたとえられていた。しかし、時代そのものが転換期と言われ始めている現在において、すでに人生という道は一本道ではない。終身雇用が崩壊し、多様な選択肢が生まれてきたが、他方でその選択は、自ら行うが故に新たなものを背負わされることでもある。このように多様な生き方を選択できる時代、人生を「転機」という概念で振り返ることは、思わぬ気づきや新しい視点を与えてくれる。

本研究では、「ライフサイクルにおける中年期」を生きる人々に注目し、後に「転機」と思われる出来事が当事者において、どのように経験され、またどのように受け止められ、それぞれの人生において意味づけられるのかを探求した。これらの問いに接近するために、中途退職教員を研究参加者として、ライフストーリーを聴きとり、退職に関わる「経験」を当事者の視点から記述するために、現象学的アプローチをてがかりにして分析をおこなった。

その結果、さまざまなことがライフストーリーに浮かび上がってきた。「退職」という「転機」は、多くの出来事やその意味が折りたたまれており、経験として人生に位置づけるプロセスでもある。退職という出来事には、相反する感情がコインの裏表のように併存しており、それゆえの葛藤や感情のゆれが見られた。それらは、語ることで捉えなおされ、意味づけなおされた。また、聴き手はそのような語り手に同伴し、他者の経験に理解や共感を示すだけにとどまらず、自らの経験をも更新することになった。また、3 人の参加者は教員を退職してもなお、「教えること」に支えられていることが示された。彼らにとって退職という経験は、教育活動とのつながりが切れてしまうことではなく、現場を離れることでより一層「教えること」や「つながり」が意識されていた。また、ライフストーリーには、参加者が生きてきた時代の教育のあり方が濃く反映していた。教育改革をはじめ、教育の現状や教員の置かれている状況が当事者の視点から語られ、生き方や人生にまで大きな影響を及ぼしていたことが示された。「転機」は、問われつつ語られることで、ライフストーリーに浮かびあがってくる。それは、人生から切り出された「分厚い経験の記述」であった。